
文書ファイル

酒井 真言

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

文書ファイル

【Nコード】

N0740P

【作者名】

酒井 真言

【あらすじ】

友人達と一緒に経営していた会社を辞めて、働かずに妻に養われていた男が、新しく就職することを約束に一人秋の京都へ行くのを許してもらう。男は紅葉の京都を観光して、その内容を文書ファイルに記して妻にメールで送る。

メール本文

メール本文

亜紀子、わたしはメールを送る理由をおまえに説明する必要がある。なぜならおまえは、「あの人は一人で京都へ行ったのに、いったい何をしているの？」とでも思い、混乱する可能性があるからだ。なにしろ、旅行へ行った者からデータファイルが送られてくるのだが、すこし考えてみれば理解できることだ。旅行に行った者から送られてくる物といったら、土産物か、土産話ぐらいだろう。

わたしがなぜこんな事をするのかというのは、朝から夜遅くまで働いているおまえに、旅行の気分を味わってもらいたいからだ。共に生活しているわたしからしたら、おまえはとても旅行に行く機会がないように見えた。それに今回の京都の旅行でも、一緒に行きたいとは一切言わず、まるで興味がなさそうだった。そればかりか、働きもせず家に居るわたしが旅行へ行こうとするのを、大声で遠慮なく非難した。おまえが罵声はっせいをあげる理由はよくわかっていたから、わたしはそのことについて反論はしなかった。だが、京都へ行くことは譲れなかった。一度でいいから京都の紅葉を観たかったのだ。

亜紀子、おまえは腹の中にわだかまりを残したまま、わたしの旅行を許してくれた。たとえ出発の直前に一言も口を利いてくれなくても、おまえの寛大な心には感謝している。

そんなおまえにわたしができる事といったら、今回の京都旅行をぞんぶんに楽しむことだろう。もしかしたら、働いているおまえは、わたしが楽しく観光することを妬むねたかもしれない。しかしそれを恐

れて旅行をつまらなくする必要はない。うしろめたさもないことはないが、それよりも楽しむことがなによりだからだ。それに、旅行が終わればわたしは職を探さなければならぬ。それが今回の旅行を許してくれたおまえとの約束だからな。

まあ、そんなところだ。だから、添付された文書ファイルには、わたしの旅行とわたし自身がまつていると思ってくれ。最近はお話することが少なくなったわたしたち夫婦だ、文書ファイルを読んで今のわたしをより理解してくれることを願う。

亜紀子、おまえは時間の無駄だと思つて最初は読もうとしないだろう。わたしはそれでもかまわない。それでも、おまえはきつと読んでくれるだろう。

ファイル1

ファイルー

東京駅発の夜行バスは六時に京都駅へ到着した。わたしが京都を訪れるのはこれで二度目だ。一度目は、多くの学生が経験するように修学旅行で訪れた。なにしろ十六年前のことで、バスガイドの話す卑猥ひわいな話に同級生と盛りあがったことぐらいしか覚えておらず、まさか京都駅がこんなに巨大だとは思いませんでした。

重い荷物を背負って駅内を歩きまわり、友人からもらった京都のツーリストマップを駅員に見せて、ゲストハウスと呼ばれる、安宿がある二条駅への行き方を教えてもらった。バスと電車があり、市内を見ながら移動することも考えたが、乗り場がわかりやすい電車で行くことにした。

二条駅に到着し、タクシーの運転手にゲストハウスの場所を尋ねると、歩いて十分で着くと教えてくれた。この時間帯は暇なのだろうか、白髪の男が二三人集まり、聞き慣れない京都弁で競うように教えてくれた。同じ言葉を繰り返すくどさは親切心の表れだろう。

詳しく教えてもらったおかげで、迷うことなくゲストハウスを見つめることができた。とても宿には見えない雑居ビルに、黄色い看板がついていた。放浪ばかりしている友人に教えてもらったとおり、一泊二千元と宿泊費はとても安い。とはいえ、しょせんは二千元クラスの質だろう。いや、二千元の価値があるのかも疑わしい。

わたしはドミトリーと呼ばれる相部屋の、二段ベッドの上に泊ま

ることになった。大人の男性が横になれるだけのスペースに、湿気臭いふとんが敷いてあった。部屋は薄暗く、他のベッドは白いカーテンで隠され、ひっそりとしていた。ベッドの足元に靴が置いてあるのを見て、本当に人が泊まっているのだと確認できた。

夜行バスの移動で背中が痛く、寝不足気味だったが、すぐに観光するつもりだった。自宅でツーリストマップを何十回と見ては、観光する場所に赤印をつけていたので、すでに行く場所がはっきりしていた。音を立てないように必要な荷物だけ持ち、そっと部屋の扉を開けた。

レセプションでは眼鏡をかけた白髪頭の男が新聞を読んでいた。友人がすすめてくれたとおり、わたしは自転車を借りることにした。赤みがかかった顔の男は表情を変えずに、マニュアルどおりらしい説明をして、数台用意してくれた。どの自転車もフレームは錆びびびて、ブレーキの利きがいまいちだった。わたしが不満そうな態度を顔に表すと、男が「観光客が乱暴に乗るから、すぐぼろぼろになるんだよ」と言った。わたしは何もこたえず、赤いフレームのカゴ付自転車を選んだ。男の言葉が言い訳のように聞こえ、妙に腹がたつた。

二ヶ月前まではマウンテンバイクで通勤していたので、自転車をこぐのに自信はあったが、変速ギアについていない自転車は小学生以来だった。サドルの位置がどうもおちつかず、こいでいてぎこちなかったが、見知らぬ土地を自転車で走ることが贅沢に感じられた。

空は澄みきっていた。霽せのかかった空に慣れてしまったからだろうか、青い空を見て思わず笑い出してしまった。わたしはツーリストマップを見て居場所を何度も確認した。その度たびに自転車に乗った通学・通勤中の人々が、さっとわたしのそばを走り過ぎた。桂川を目

指してわたしは自転車をこいだ。

上野橋に着いて景色の広さに驚いた。緑・黄・赤が混じる山々には、真つ白い濃厚な雲が低くのしかかり、ところどころ大きな影を射している。空は水色からあさぎ色へグラデーションを成していた。斜めから射す強い太陽光が川原を照らしては、ススキの群生が揺れるように輝いていた。

橋を渡りはじめた時、ちょうどヘッドホンで聴いていたベートーベンの「交響曲第三番・第四楽章」が第五自由変奏に入った。一直線の橋から眺める桂川の景観は、こみあげる木管楽器とバイオリンに合わせて一変し、景色以上の意味を持った。わたしは、自然がこれほどまで素晴らしいと感じたことはなかった。

土と草の匂いが香るサイクリングロードをふらふらと走り、躍動する音楽に合わせて豊かな川岸の自然に見とれた。茶色い正方形のグラウンドには、白や灰色のハット帽をかぶったご老人が何十人も集まり、ゲートボールの大会が開かれていた。

マップ上では遠く見えた桂離宮は、思いがけない早さで着いてしまった。桂川の雄大さにあまりにも感動してしまい、目的だった桂離宮はどうでもよくなってしまった。とはいえ、来たからには見ないといけない。ほとんど空いている駐車場に自転車を停めて、入り口を探して歩いた。こげ茶のハット帽とベージュのステンカラーコートを着た中年男性が歩いているだけで、辺りは鳥の鳴き声に響いていた。

砂利の道を歩いてこげ茶の建物に近づくと、白い頭巾をかぶった老婆が竹ぼうきで落ち葉を掃いていた。入れるのかと尋ねると、老婆は、「わたしにや、わかりません。あちらできてください」と

言った。しわだらけの老婆が向いた先を見ると、小さな木作りの門の奥に、黒のロングコートを着た背の高い男性が立っていた。男はポケットに手をつっこみ、寒さをまぎらわすように体を落ち着かずに動かしていた。

イヤホンをしたその男に尋ねると、「予約はいたしましたか？」と男は丁寧にこたえた。予約制とは知らず、あつげにとられてしまった。わたしは一言こたえて、歩いてきた道に戻った。腹は立たず、やけにいさぎよかった。

それから本格的に観光をはじめた。マップと住民をたよりに、赤印のついた観光名所を訪れては、青ペンでチェックをつけた。

桂離宮から西へ向かい、地藏院・苔寺・鈴虫寺をまわった。わたしは地藏院で拝観料五百円を払って失敗したと思った。寺をまわるのに金はかからないもの（いったい、何を根拠に？）だと思いきみ、たったの千二百円程度しか持っていなかった。地藏院は観光客がおらず、竹林に囲まれた小さな寺は時を越えたように静かだった。竹林から射す光の効果で、歩きながら眺めている竹が波打つように揺れていた。

拝観は十五分ほどで終わった。どうもしっくりこなかった。どうやら期待しすぎたようだ。入り口に戻り、赤い自転車に乗って走りだすわたしのそばでは、寺の人間が緑色のドライヤーのような機械を持ち、地に落ちた紅葉の葉を舞いあがらせ、一ヶ所に集めていた。

苔寺は予約制で、鈴虫寺は拝観料が五百円だった。銀行のキャッシュカードを宿へ置いてきたのを後悔した。わたしは財布を持っておらず、必要以上の金を持たない主義だった。どちらの寺も入り口を見るだけで、すぐに移動した。

居場所を確認するために道のわきでマップを広げていると、自転車に乗った畑仕事に似合いそうな小男に話しかけられた。わたしは「つぎは松尾大社を見に行こうと思ってます」とこたえようと、近道を教えてくれた。わたしはついでに「松尾大社は無料ですか？」と尋ねると、男は素朴な笑顔で、「お金はかからないよ」とこたえた。わたしは頭をわずかに下げて礼を言い、教えてもらった小道へ進んだ。

茶店を眺めながら走っていると、店先に立っていた小柄な中年女性と視線が合い、笑顔であいさつをかわした。見知らぬ人と何気ないあいさつ、いつ以来だろう？

月読神社で足を止めてから、松尾大社へ着いた。一杯ぐらいは飲めるかもと、酒の資料館へ期待して入ったが、酒造りの工程の資料が展示されているだけだった。拝殿に巨大な絵馬が取り付けられていて、楼門付近では地元の小学生らしき子供達が、いたるところで尻を地につけてスケッチをしていた。わたしは庭園を気にもとめず、自転車へ戻り、マップをみて北へ進んだ。

民家ばかりから旅館や茶店のある町並みへ変わり、すぐに渡月橋へたどり着いた。自転車を嵐山公園の砂利道に停めて、渡月橋を歩いた。はじめて見る嵐山の景観はもちろんきれいだだったが、上野橋からの眺めほど心をゆさぶるものはなかった。橋の両端は人でごった返し、わたしは一方通行の歩道を人々の遅い流れに従って歩いた。どこを見てもカメラを顔の前にかざした人ばかりで、狭い歩道の障害物となっていた。落ちついて橋の上から景色を眺めることができず、わたしは急ぐように橋を渡ったが、交差点も人であふれていた。わたしはそのまま真っすぐに歩いて天龍寺へ向かった。

天龍寺も人の流れがつづいていた。さまざまな人種の観光客が入り交じり、団体客は境内の道を横に広がったり、一つの塊のようになったりして、群れを成してのろのろと歩いていた。聞き慣れない言葉を話す蟹股歩きの団体もいれば、背中の曲がった中年の男女の団体もいた。点々とする紅色の楓（かえで）の木は暗闇を照らす灯りのようで、そのまわりを夏の虫のように人間がところどころ集まっていた。デジタルカメラを持っていたが、わたしは葉を撮る気がしなかった。むしろ、木に群がる人間を撮りたくなかった。わたしは庭園に目もくれず（持ち合わせがない）、境内を抜けて嵐山公園へ向かった。

川ぞいの道を渡月橋へ向かって歩いてみると、細い車輪に光がまぶしく反射した、黒塗りの人力車が数台待機していた。手ぬぐいを頭に巻きつけ、足袋を履いたあさ黒い顔の若い男が、うれしそうな笑顔を浮かべて行き交う人々にあいさつをしていた。人力車の仕事にわたしにはとても出来ないと思った。

橋を渡るあいだに嵐山公園を眺めると、たくさんの人がぼつぼつと見えた。川岸には男女や家族が何組も座り、立つたままカメラをのぞく人もいれば、川にむけて石を投げる子供もいた。灰色の砂利には屋台が並び、ベンチに座って食事している人がいれば、小さい子供の動きをビデオカメラで撮影している若い夫婦がいた。

わたしはふと、マップに載っていた嵐山モンキーパークを思いだした。嵐山公園は小さな人々がうごめき、まるでモンキーパークを見ているような気がした。しかし、猿は一匹もおらず、いるのは人間だった。モンキーパークではなくてヒューマンパークだと思った。パーク（公園）という言葉の意味をはじめて理解したような気がした。

時刻は十二時前だったが、おなががすいていたので食事をとることにした。公園のベンチに座り、うぐいす色の手さげバッグからコンビニで買ったツナおにぎりを取り出した。真ん中から封をあけ、海苔が切れないように慎重にビニールをはがしてからひと噛みした。

空は青く、大きな白い雲が浮いていた。太陽がすがたを現していたが、陽射しは朝に比べるとにごっているように思えた。ファーのついた紺色のコートを脱いで、ペットボトルの茶を口にした。わたしはヒューマンパークを思い出し、今は自分もその公園内の一景色だと考えると、妙におかしかった。

目の前を通る人々の大半が幸せそうな笑顔を浮かべていた。景色全体を感じるように一人で歩いている若い女性もいたが、ほとんどの人は誰かしらと行動していた。わたしは口を動かしながら人々を見つづけた。

働いていた当時のことを思い出した。高校の友人達と運送会社を興^{おこ}し、会社を大きくすることに一生懸命になっていた当時のことだった。わたしは会社を辞めた理由を改めて考えた。それはなんでもなかったのだろうか？ この疑問は会社を辞めてからも何十回と思いつかんだ。

わたしは高校の友人が大好きだった。友人達と一緒に若い時代を過ごし、何かを成し遂げようとかんばるのは、つらいことがあったにしても、非常に幸せなことだと思っていた。亜紀子と結婚して一年が経ち、智也が生まれて間もない頃だったので、時間のほとんどを仕事に費やした。朝から夜遅くまで働き、仕事を考えない日は一日もなかった。父親として家族を養っていくという責任感と、青春を共にした友人達と働くことがうまくかみ合い、今までにないほど充実した日々を過ごしていた。それなのに、なぜ？

わたしは手さげバッグから昆布のおにぎりをとり出した。

仕事は順調に進み、仲間も増え、会社は着実に大きくなっていった。立ちあげた時期からいたメンバーは、体から頭を使う仕事に変わっていった。仕事が増え、仲間が加わったことで多くの意見が飛び交い、会社は枝葉を伸ばすように細分化されていった。しだいに社内ルールが生まれ、毎週会議が開かれるようになり、しぜんと統制がとられるようになった。しかし、友人同士で運営されていた会社だった。

二年もすると会社の成長は勢いがなくなり、安定した活動に姿を変えていた。わたしはすっかり会社という機械を動かす部品になっていた。会社を推進させたり、構造を変化させる部品ではなく、ただ、その活動を維持するだけの部品になっていた。いや、その部品だったのかもわからない。何の役にも立たないのに、意味もなく組み込まれているだけの部品だったかもしれない。

わたしは会社をさらに大きくしたかった。収益を多くあげて、家族を安心させ、友人達の収入を増やしたかった。だが友人達から見たら、会社は十分な大きさだった。わたしはそれがわからず、わたしが見ていた会社の大きさがわからなくなってしまう。いつからか、ミーティングでのわたしの発言後は、沈黙した空気が流れることが多くなっていた。

わたしはしかたなく、部品になることを受け入れた。それから、まるで魂を抜かれてしまったように、仕事に対しての情熱は消え失せてしまった。それまでは月に二日ほどしか休みをとっていなかったのが、週休二日と労働時間の短縮を要求していた。友人達が残業して帰ってくるのを事務所で待つことはなくなり、定時になったら

そそくさと帰宅するようになった。積極的だった会議での発言は、自分の要求以外控えるようになった。社内での気がついた事にも口を開かないで、一分でも早く会議が終わるのを望んだ。

友人達の純粹な心は好きだったが、語彙ことばの乏しい雑談が前から好きではなかった。本人のいない所でその人の事を卑下にする会話や話している最中に口をはさみ、あげあしをとるが嫌だった。知ったかぶりする適当な姿を見るのも嫌だった。会話に参加して、自分もその一員になって笑うのが嫌だった。そんな習性が身につくのを怖れ、徹底的に雑談を避けるようにした。朝の出勤時、昼食時、仕事後、わたしは常に一人を求めた。

仕事も怠なまけるようになった。営業に出かけては、コンビニをまわって立ち読みばかりしていた。広告制作の資料集めと言って都内へ行き、自分の気になる店を見てまわった。事務所へ戻る時間が遅くなると言って、友人達と会わない口実を作った。わたしは友人達が好きだった。だが、一緒に働く友人達の行動にあらを探しては侮蔑ぶへつしていた。心の中で友人達を非難し、無関心を装っていた。

おもわずはつとなつた。おにぎりはすでに食べ終わり、右手できりに顎あごをさすっていた。携帯電話で時刻を確認して腰をあげた。わたしは目の前にいる人々を眺めた。笑いながらふざけあっている数人の若い男女が理解できなかつた。

マップ上の赤印を目指して北へ進んだ。渡月橋を自転車で渡り、天龍寺を越すと、すぐに清涼寺へ着いた。門の付近に自転車を停めて、境内へ入ると黒と白の縞模様の本堂が目に入った。広い境内は人がまばらで、空間にゆとりがある。拝観はせずに、歩く速度をゆるめて景色を見てまわった。陽射しは強かったが、風の冷たさが熱

くなる体をつまい具合に冷ましてくれた。紅葉も静かに見ることができた。紅葉の葉が日光に透かされ、周囲の色よりも一段と浮いていた。とくに淡黄色の銀杏いちょうの葉がムラがなくて綺麗だった。

自転車に戻り、次に宝篋院と二尊院を訪れたが、どちらも拝観料がかかるので入り口を見るだけで終わった。宝篋院の入り口の前では、一眼レフカメラを持っていた中年男性が数人ばやいていた。写真撮影の制限に不満があるようだ。

いまさらになって、京都の寺巡りは金が必要だと気がついた。どの寺でも拝観料をとられるので、庭園を見ることができたのは地蔵院だけだった。そもそも、京都の紅葉ばかりに気をとられ、庭園を楽しむことすら知らなかった。友人にもらったツーリストマップだけでは観光場所の雰囲気を知ることができず、下調べをもっとするべきだと後悔した。けれど、京都の観光情報誌を読む気にもならなかった。自分の想像を頼りに京都へ来たようなものだった。

自転車をこぐのがおっくうになり、観光している意味があるのかと疑問に思った。東京では見ることにない古い家々を眺め、視線を上げればそびえる山々をうれしく思ったが、満足に拝観できないのがわたしに要らぬことを考えさせた。所持金と拝観料ばかり気にして、心が狭くなっていく自分がいた。わざわざ京都へ来て、ひもじい思いをしている自分が馬鹿らしくなった。キャッシュカードを取りに宿へ戻ろうとも考えたが、再び嵯峨まで戻ってくる気にはなれない。拝観できなくてもいいから、赤印のついた場所をまわろうとわたしは思った。

わずかな人の流れについて細い坂道を上がると、祇王寺にたどり着いた。周囲には別の寺もあったが、やはり拝観料をとられるので入り口を見るだけにした。

祇王寺の拝観料は三百円と安く、入るか迷っていると、大覚寺の拝観券と一緒に買えば安くなると、受付のそばの看板に書かれていた。わたしは祇王寺と大覚寺の拝観券を六百円で購入した。所持金は残り二百円ちよつと、このあとは拝観することはできないだろう。そのかわり、あれこれ迷うことがなくなるのでわたしはほつとした。

祇王寺の紅葉の三分の一は散っていた。昨晚の雨で地に落ちたらしく、杉苔すきこけの緑を隠す黄色と赤の葉には色艶いろつやが残っていた。やっと自分の想像していた京都の紅葉を見ることができて胸はずつとしたが、拝観できなかった寺々を思うと悔しくなった。嵐山に着いたときり活躍していなかったデジタルカメラを手に持つと、自分の滑稽こっけいさと都合のよさにおかしくなってしまった。結局人々同様、わたしも夏の虫なのだ。なにせ、それを目的に京都へ来たのだ。

雲に陰っていた太陽がちらつとかおを出して、豊かで見ずみずしい地面をするどく照らす。周りにいた人々は慌ただしく写真を撮り、しきりに感嘆の声をあげていた。わたしもおなじように写真を撮り、頭の中で声を出していた。その真価を發揮した彩色豊かな空間には、紅葉を見ずに雑談する人がいなかった。わたしは誰かと話しをしたわけではないが、その場にいた人々に親近感を抱いた。目の前にいた老夫婦が少ない言葉で話すのを聞き、つい顔がほころんでしまった。

早朝に味わったような旅の喜びを取り戻し、自転車に乗って大覚寺へ向かった。半日自転車をこいでいたがまるで疲れは感じなかった。

人の流れについていき、土産屋が並ぶ傾斜の道を進むと、化野念仏寺へ着いた。自転車を停めて石段のそばでマップを開くと、赤印

はついておらず、大覚寺とは逆の方向へ来ていた。石段の上方を眺めていると、細い顔の男性が、自転車を停める場所はもう少し先にある、と教えてくれた。小さい声でわたしは礼を言い、男が指差した方へ進んだ。さりげない心遣いに感謝しつつ、自分にはできないことだと思った。

入り口だけ見て、すぐにその場を去った。大覚寺までの行き順を数回口ずさみ、わたしは自転車を走らせた。

十五分ほどで大覚寺に着いた。白髪の警備員に自転車置き場を尋ね、目の前にあるバス乗り場のわきに停めた。晴れていた空はいつものまに明灰色の雲に覆われて、ぼつぼつと雨が降りはじめている。足早に大覚寺の境内へ進んだ。

嵐山ほどではないが人は多かった。しだいに雨足が強くなり、夕イミングよく大覚寺へ着いたと思った。庭園は整然としていたが、空が薄暗いせいなのか、それほど大したものに見えなかった。

傘を持っていなかったので雨が止むのを待った。昨日の天気予報では晴れだったのでそれを信じきっていた。それに、わたしは折りたたみ傘じたいを持っていなかった。雨はすぐに止むものだと思いき、存分にお堂を味わうことにした。

お堂を二周したあと、一本の楓の木を眺めつづけた。光りが射していないにもかかわらず、真紅の葉は気品をもって輝き、今まで見えてきた楓の葉が贗物のように思えた。考えてみればあたりまえのことだが、楓の木にも個体差があるのだと驚いた。わたしはその楓に見とれていた。

通り過ぎる人々はその楓から逃れられないように、声をあげて写

真を撮っていた。油っぽい顔の男が、「建物の赤に負けじと色づかせているな」と言った。楓の前のお堂内は目が痛くなるほどの朱色に染まり、わたしはおもわず納得した。男はその言葉が気に入ったようで、連れの女性へさらに二度声に出した。

一時間ほどで雨は止み、待ち望んでいた光が射しはじめた。楓の葉は光りに透かされ、わたしは息をとめてその美しい変化をじっと眺めた。すると、なんだか悲しくなってしまう、嗚咽してしまいうになった。

お堂の外へ出て、大沢池の周りを散歩した。水面はかすかに揺れて山の景色を反射させていたが、鴨の群れが同じ方向へむかって泳ぎ、いくつもの小さな波が水面に斜線をつくっていた。のんきな鴨の鳴き声が静かな池に不器用に響いていた。

池のほとりの“ツブラジイ”の巨木に近づき、地面から盛りあがったたくましい根元に腰かけた。残しておいたおにぎりを食べながら池を眺めていると、数人の観光客が目の前を通った。観光客は巨木を驚いたように眺め、わたしはばつが悪く、目のやり場に困ってしまった。

夕暮れ時がせまっているせいか、それとも晴れ間がなくなったせいか、観光する気があまり起きない。マップを見ると、嵐山・嵯峨エリアの赤印はほとんど青いバツ印がついていた。わたしは東にある弁財天社へ向かうことにした。

弁財天社へつづく道は田園風景が広がっていた。黄色い山並みの色彩を成している細かい木々を見ることができた。畑には案山子かかしが十体ほど整列するようにつっ立っていた。

弁財天社はさびしかった。広沢池にでっばるようにつきだした石垣の島には、小さほこらがぼつんとして、背の低い楓の木の下にベージュのハット帽をかぶった老人が座っていた。風は穏やかだったが、冷たく、肌寒い。わたしは持っていた茶色の皮手袋をはめて南へ向かった。大沢池を見るまえに来ればよかった。

嵐電の線路を越え、鹿王院に着いた。人の気配がしなかったので、すでに拝観は終了してしまったのかと思い、おそろおそろの門の敷居をまたぐと、小さな受付小屋に女性が座っていた。女性は、「おひとりですか？」と落ちついた声で話し、拝観券を手にとった。わたしは返事に困りつつ受付場所を見ていた。拝観料が三百円だとわかり、「持ちあわせがないので、また、今度来ます」と、小さな声を出した。女性は表情を変えずに、「そうですか、では、またいらしてください」と言った。わたしは静かな雰囲気がただよう鹿王院を拝観できないのが残念だった。また、たった三百円も持っていない自分が情けなくなり、持ちあわせのないことを理由にした、と思われるのが嫌だった。

観光する気がなくなってしまった。マップを見ると、宿へ戻る途中に広隆寺があったので、拝観料はかかるだろうが寄ることにした。空は暗灰色の薄い雲が広がり、雨がポツポツと降っていたが、ときたま強い夕暮れの陽が射した。なんともおかしい天気だった。

わたしは広隆寺の駐車場わきに自転車を停めた。境内は夕暮れ時だからか、人がほとんどいなかった。本堂に近づくと受付小屋が見えたので、すぐに引き返した。重苦しく湿った境内を歩いていると、雨が急に強く降りはじめた。丁度南大門が目に入ったので、足早に近づいた。

雨はさらに強く降り、雨具を持たない人がどこからか集まり、人ほど南大門の下で雨宿りをしていた。大きな毛玉のついた茶色のニット帽の若い女性が、両親らしき初老の男女と話をしていた。また、黒いレザーコートを着たほっそりした顔立ちの男が、耳に白いイヤホンをしたまま、きょとんした顔で遠くを見ていた。カメラの機材を持っていた三人の若い男は、しきりに話をしていた。

わたしは金剛力士像の前から嵐電の線路を眺めていた。踏み切りの鐘かねの音が鳴り、白茶色の一両車人が大勢乗せて通り過ぎ、太秦駅に到着した。修学旅行の時に広隆寺を訪れたことを思いだした。クラスでの団体行動ではなく、班行動で来たのだ。数人の男女の班行動は、普段はほとんど話すことのない女子との会話が思いのほか新鮮だった。あの頃は何も考えずに集団行動を楽しむことができた。

雨はなんだか雨足を弱め、そのたびに雨宿りしている人は減っていった。時間を気にして本堂へ歩いていった家族もいれば、待ちきれずに出ていった顔の赤い男もいた。わたしは予定がなかったので急ぐこともなかった。誰かにせかされることもなく、景色をぼんやり眺めていた。雨は、わたしにやることを与えてくれた。

西の空は柿色に染まっていたが、上空は灰色の雲がせわしなく動いている。強烈な西陽にしびが射しこみ、境内のどこどころの色が映はえた。雨はかわらず降っていたが、銀杏は黄金色を生き活きと輝かせていた。東の空には巨大な虹が曲線を描き、イヤホンをした男が目を大きくして眺めている。学校帰りの子供達は原色の小さな傘をさしてうれしそうに歩いていた。虹は赤・黄・緑・青と、はっきりではないが色を識別できるほど大きく、今までに見たことのないほど美しい。わたしは悲しくなってしまった。

雨が止んだころ、南大門には人がいなかった。わたしは駐車場へ

向かって歩いた。空の色は薄橙色に沈んでいた。わたしはふと早朝に通った上野橋を思い出し、そこへ寄ってから宿へ戻ろうと思った。

ファイル2

ファイル二

ドミトリーはどうも落ちつかなかった。部屋は静かだが、荷物をさぐる音や、鼻をかむ音が気になり、わたしは音をたてないよう静かに横たわっていた。呼吸を意識してしまい、息がつかまってしまった。呼吸がこれほど難しいとは思わなかった。また、寝返りをうつものにも気をつかった。深い森の中で獣に気づかれないうつ、気配を消すことに集中していた。おかげで朝から休むことなく行動して疲れていたはずが、すぐに寝つけなかった。

次の日、わたしは明け方に目を覚ました。他人の呼吸によんだ部屋にいるのが嫌で、不思議なほど目覚めがよかった。全身を集中させてうぐいす色の手さげバッグを持ち、小さな木のはしごを降りて、こげ茶色のスニーカーのかかとを踏んだ。ゆっくりと部屋のドアを開けた時、歯ブラシを持ち出し忘れたことに気がついた。歯ブラシは黒いポストンバッグの奥底にあった。寝る前に今日の荷物を用意しておいたので、歯ブラシがすべて台無しにしてしまったように思われた。しかたなく、そのまま部屋を出て一階へ下りた。

レセプションには誰もいなかった。わたしは入り口のドアを開けて、近くに落ちていた石を拾い、ドアのあいだに挟んだ。オートロックの鍵の番号を覚えるのが面倒くさかった。

近くのコンビニでツナマヨネーズのおにぎりと豆乳を買い、宿へ戻った。レセプションの奥を占めている大テーブルのイスに座り、マップを広げた。昨日考えていたとおり、自転車で山科へ行くこと

にした。疲れてもいいから自転車で行動したかった。

豆乳を腹に流しこんで席を立ち、昨日と同じ赤いフレームの自転車にまたがった。皮手袋をはめて、前のカゴに手さげバッグを入れ、東へむかつて出発した。外は寒かったが、空気は澄んでいて空は雲ひとつなかった。

道はとてもわかりやすく、三条通を真っすぐに進めばよいだけだ。わたしは御池通を東へ進み、鴨川をこえてから右へ曲がった。桂川と違い、鴨川はきれいに整備されていて、川沿いに並ぶ茶色い建物が川と街の関わりを感じさせた。

三条通にぶつかり、左へ曲がった。道はしだいになだらかな上り坂となり、自転車を押して歩道を歩いたが、早朝のおかげで苦にならなかった。昨日の朝同様に、見知らぬ土地にいることがうれしかった。ただ、道路を走る車の排気ガスがやけに鼻についた。

坂を上りきると、下り坂が続いた。ヘッドホンから流れる音楽をテンポの速い曲に変え、ブレーキを小刻みに利かせながら下りた。温まった体に乾いた風が吹き抜け、体は急速に冷やされた。

思ったよりも早く山科駅に着き、ヘッドフォンをはずして、やわらかくなったマップを見た。わたしはまず毘沙門堂を目指した。

なだらかな坂道を北へ走ること約十分、色づいた楓かえでの木が数本見えてきた。赤と黄色の葉に埋められたアスファルトの駐車場に自転車を停めて、急な石段を上った。

^だ境内はこじんまりとしていて、中年女性が三人いた。わたしは枝垂れ桜のそばえしやくにいた女性達に小さく会釈した。

拝観はせずに境内をひと回りして、なだらかな石の道を下りた。石の道は紅葉の葉で薄紅色に染まり、黒ぶち眼鏡の若い男が重そうなカメラで写真を撮っていた。

駐車場に戻るとハイキング姿の中年男性が数人、奥の道へ歩いていった。男性達の服装が気になったので、わたしはあとを静かに追った。すると、道のわきにある木の案内板に“南禅寺”と書かれていた。わたしは立ち止まり、いったい、どれほどの距離を歩くのか考えた。まわりには誰一人おらず、小川の流れる水の音と、にぎやかな小鳥の囀りがするだけだった。木々の隙間から射しこむ光がまぶしく、小道は影との対比が際立っていた。自転車が厄介な存在に思われた。

近くにある双林院に寄ってから、自転車で山科駅へ戻った。それから若宮八幡宮と山科本願寺南殿後、蓮如上人廟所、元慶寺、阿弥陀寺をまわった。拝観料はかからず、金のことを考えずにすんだが、どうも違和感があった。マップ上には文字が書いてあるだけで、寺の規模や様子はわからず、実際に行かないかぎりはどんな場所かわからなかった。観光客はほとんどいなくてとても静かだったが、想像するような京都らしさはあまり感じられず、自分の地元の寺でも見ているような気がした。わたしが山科に住んでいたら、ほとんど訪れることはなさそうな所ばかりだった。京都という地名と、はるばる関東からやって来たことが、寺を、寺以上に見せているのではないかと思った。

今日は水曜日だということ进行いだし、目についたコンビニで週刊誌を立ち読みした。

気をとりなおし、南へ向かった。昨日よりも晴れた空は青く、山

科を囲う山々をはつきりと見る事ができた。生まれ育った関東では、周りに山がなかった。冬によく晴れた朝や雨上がりのあとに、遠く西のほうでぼんやりと見る事ができる程度だった。

起伏に富んだ小高い小道を走りながら山科の街並みを眺めると、地上の地形を感じる事ができた。寺を気にしてマップを広げるのがおっくうになり、むしろ、寺などなくなってしまい、ただ自転車で走っていたかった。

やがて大石神社に着いた。大石神社が“元禄赤穂事件”で有名な大石内蔵介を祀^{まつ}っているとは知らなかった。その名は何度も聞いたことがあったが、事件の顛末^{てんまつ}を詳しく知っているわけではなく、事件の名前を知っているだけだった。おそらく、忠臣蔵が好きな人だったら楽しめるだろう。わたしは忠臣蔵を一度も見たことはなかったが、機会があったら興味を持って見ることになるだろうと思った。

観光地を訪れることで、歴史の一端にふれ、興味を持ち、より知識を深めていく。もし、旅を続ける生活を送っていたら、どれほど活きた知識を得ることが出来るだろう？

わたしは小さな四辺の柵の中にいた馬、ファラベラ・ミニホースの“花子”見つめながら考えていた。持っていたバナナを手さげバッグから取り出し、隅の日陰にいる花子に見えるように前へ出した。芦毛の花子は視線を動かさず、何の反応もしめさない。わたしはおもわず苦笑いを浮かべてしまった。

バナナをカバンに戻して歩き出すと、小柄な中年女性が近づいて花子に話しかけた。花子は聞こえていないかのようで、銅像みたいにじっとしていた。「なんで神社に馬がいるんだ？」と疑問に思っていたが、花子に話しかける女性を見て、考えるのをやめた。

大石神社の近くには岩屋寺があり、ついでに寄ることにした。寺は山の麓ふもとにあり、寺からの眺めは意外に壮大だった。目の前にある公園には、葉の大きな楓がルビーのように色づいていて、木の根元から見上げていると色感が狂いそうだった。写真を数枚撮り、立場所を何度も変えて、気の向くまま眺めていた。公園内は、白いハット帽をかぶった中年男性が、上着を腕に抱えたまま写真を撮りつけており、離れたところの木々の陰には、小さな子供達がたわむれていて、数人の保育さんが、顔をしわくちゃにして泣いている子供をあやしていた。

折上神社に寄ってから、勧修寺を目指して南へ進んだ。

白い壁に沿って走り、勧修寺の入り口へ着いた。自転車が一台も停まっておらず、停める場所に困ったが、とりあえず壁際に停めた。

今日初めての拝観料を支払い、境内へ入った。やっと京都らしいというか、有名な観光場所にやって来た。水戸光圀公の寄進だという灯笼とうとうと、樹齢七百五十年の“ハイビヤクシン”を見たが、いまいちそのすごさがわからなかった。

わたしは池の前のベンチに座った。池は枯れてしぼんだ睡蓮すいれんの葉が埋めつくし、生気が感じられず、訪れる時期が悪かったのだと思った。昨日同様にツナおにぎりを食べた。陽射しが強くとても暖かい。再び友人達と働いていた頃を思い出した。

わたしはいつも一人で昼食を食べていた。狭苦しい事務所の中で友人達の雑談を耳にしながら食事するのが嫌で、昼のチャイムが鳴ると、バタバタと近くの公園へ移動した。公園には大きな平たい木のベンチがあり、わたしは靴を脱ぎ、あぐらをかいておにぎりを食

べた。

晴れた日は親子づれが幸せそうに遊具で遊び、曇りの日は中年の男女が散歩をしていた。わたしはそれらの人々を毎日眺めて静かな時間を過ごした。食事後はベンチに横になり、目をつぶって周囲の音に注意した。無機質な画面を見続け、耳にしたくない会話を聞いて疲れきった感覚器官は、急速に回復できた。なによりも心が休まった。

いつからだろう、人との食事を避けるようになったのは。小学生の時はどうだったか？ 周囲の机を向かい合わせにして給食を食べていたが、特に何とも思っていなかった。

中学生の時はどうだった？ 覚えていない。どのように昼食をとっていたのだろうか？ 給食ではなかったから、弁当を食べていたのだろうか、でも、どうやってた？

高校の時は？ はつきりと覚えている。三限目が終わると、すぐに弁当を食べた。昼休みに食事をする人間を探すのが面倒だった。

では、大学の時は？ いつも一人で食事をとるようにしていた。

そう考えると、友人と働いている頃、一人で食事をとっていたのはなんら不思議ではない。むしろ、あたりまえの行動ではないだろうか？

人と食事するのはさほど嫌いではなかったが、好きでもなかった。ただ、会話をしたくなかった。意味のなさそうな会話を喜んでする人が理解できず、わたしは無言で聞いているか、あいずちをうって苦笑いをしていた。かといって会話が嫌いなわけではなく、建設的

な話、行動に直結するような話は好きだった。とにかく、仕事の愚痴や不満を話すのは嫌だった。

人の話を聞いていると、こういった話題が多かった。友人と働く前、飲食店でバイトしていた時もそうだった。わたしはホールの仕事を担当していたが、アルバイトの態度が気に入らなかつた。全員が気に入らないわけではないが、客が少なく店が暇な時、楽しそうに雑談する連中の気が知れなかつた。仕事中に話すのは悪いことではないと思っていたが、働いていることを忘れていくかのように、分別なくベラベラと話している姿を見ると、胸がむかむかとした。なぜなら、いくら店が暇であっても、客は数人いるのだ。客がいることにはなんら変わりがないからだ。

だからといって注意はしなかつた。注意したところで直るわけがなく、わたしの目の前で話さなくても、わたしがいなければ話すのは目にみえていた。それに、注意したあと、ひどい自己嫌悪におちいるのが嫌だった。

暇をみては雑談する人間を理解できなかつた。学校に通っている時も、授業中にひそひそと話す人間、授業について不満をもらす人間、教師を無意味に馬鹿にする人間が理解できなかつた。

バナナを食べ終え、茶で口をゆすいだ。ツーリストマップを見て次に訪れる場所を確認した。

小野小町が住んでいた随心院を訪れた。なにを勘違いしていたのか、“小野妹子”のことだと思っていて、自分のばかさ加減にあきれた。

境内には裸の木々の広い梅園があり、ここも来る時期が違ったの

だと思った。拝観はせずに裏へまわり、小野小町への恋文が埋められているという文塚ふみづかを見ることにした。

文塚は緑に囲まれてひっそりとしていた。周りの木々はかすかに揺れていて、灰色の塚の前に立つとおもわず鳥肌が起った。わたしは踵かかとを返し、塚の正面の白い壁を見ながら歩いていると、茶色い点が二つあることに気がついた。

近づいてみると、小枝のような茶色いナナフシだ。小学生以来見かけることがなかったので、ふと、微笑ほほえんでしまった。ナナフシはじつとしていた。つい、ナナフシを手でやさしくつかみ、近くの枝に乗せてしまった。ナナフシは微動だにしなかった。わたしは数歩あらずさりして、ナナフシを眺めた。すぐに白い壁にはりついている残りの一匹を眺め、おもわず笑ってしまった。そして、「もしかしたら夫婦だったのでは？」と思い、申し訳ないことをしてしまつたような気がした。

自転車に戻り、わたしは醍醐寺を訪れた。

醍醐寺の境内は今日訪れたどの場所よりも広く、ツアーの観光客を見て有名な場所だと知った。

わたしは拝観料を払い、まずは伽藍を拝観した。五重塔はもちろんだ迫力があつたが、弁天堂の景観がなによりも素晴らしく、初めて紅葉の美しさを知った気がした。力強い陽射しに照らされた楓の葉は薄紅色に輝き、透き通つた水底の白い砂の上に葉が散りばめられ、池の奥からたえず広がる小さな波紋がその影を映していた。手さげカバンからウイスキーの小瓶を取り出し、口に入れ、飽きるまで池の周りを歩いた。今日の天気にあらためて感謝をした。

次に三宝院を拝観したが、どうもパツとしなかった。大覚寺でもそうだったが、陽が陰ったせいも、庭園の魅力がいまいちわからなかった。だが、庭園を見る眼がまだ養われていないだけで、回数を重ねるごとに魅力を発見するのだとも思った。

陽はしだいに傾き、さすがに体は疲れていた。足も疲れていたが、なによりも目が疲れ、頭がはつきりしなかった。

次の観光場所の善願寺の場所を確認し、坂道を下りて向かったが見つけることはできなかった。探るのが面倒になり、一言寺へ向かったが、同様に見つからなかった。

法界寺を訪れ、拝観もせず、すぐにその場を去った。もう小さい寺をまわる気がせず、伏見へ向かった。

観月橋を往復して宇治川を眺め、伏見の町中をさまようように走り、寺田屋の外観を見て、わたしは宿へ戻ることにした。

宿は非常に遠かった。

ファイル3

ファイル三

さすがに長時間自転車をこいでいただけあって、昨日は部屋の静けさを気にすることなく眠ることができた。わたしは九時ごろ目を覚ました。市の温水プールにでもありそうな水の出がはっきりしないシャワーで体を温めてから、焼いた食パンにマーガリンをぬり、新聞を読みながら食べた。この宿には冷蔵庫と電子レンジ、電気ポット、トースター、キッチンがあり、あるていどの自炊は可能だ。こんな生活的な宿があるとは知らなかった。

この宿は一泊二千円だから、もし、一ヶ月滞在するとしたら、約六万円だ。水道光熱費はかからないとして、食費などの生活を考えたら？ 高い！ 手軽に寝る場所を変えることができるにしても、一ヶ月六万円は高い。

新聞紙の上にパン屑をポロポロと落としつつ、熱い紅茶を飲んだ。二日続けて自転車を運転したせい、体がなんとなくだるかった。それに、観光にもすこし飽きた感じもして、遠出する気にもならなかった。

食事を終え、友人からもらったツーリストマップを広げてどこへ行くか検討した。端々（はしばし）は折り曲がり、ところどころから切れはじめ、マップはしわだらけだった。二条城が宿から一番近かったが、外壁を見るかぎりでは大味な感じがして、まったく行く気が起きなかった。京都御苑も近かったが、やはり行く気がしない。

わたしは考えをふりだしに戻し、昨日の続きから観光をしようとした。伏見で観光を終えたので、その続きとして、あまり遠くなく、有名そうな伏見稻荷大社から見ることにした。

今日も同じ自転車を借りて、無愛想な若い女性従業員の、「いつてらっしゃい」の言葉に反応せず、わたしは南へ向かった。サービスピ精神のこもっていない機械的な言葉が不愉快だった。

道の広い堀川通を南へ下がり、線路を越え、十条通を左へ曲がった。京都は道路が広く、整然と縦横にはしっているので、方向音痴のわたしにはとても助かった。

本町通という車線のない通を右へ曲がり、すこしばかり走ると、左に石畳の細い小道が目に入った。小道に入り、茶屋にいる人の目を気にしながら、自転車をわきに停めた。

千本鳥居の入り口に立ち、ぎよっとした。異常とも言えるほどの鳥居が並び、血のトンネルが小道の奥まで続いていた。朱色が好きな人や、鳥居に興奮を覚える人なら大きな喜びだろうが、神社の重々しい雰囲気は苦手な人や、人一倍臆病で幽霊に敏感に反応する人は厳しいだろう。わたしは新鮮な鳥居のトンネルを遅い足取りで進んだ。

紅葉はさほど見あたらなかったが、どこからも清らかな鳥の囀りが響きわたり、残された自然を感じる事ができた。暗黄緑色の小さい池を中央に、道は二つに分かれていた。わたしは人氣ひとけのない右の小道を選び、奥へ進んだ。

鳥居のない土の山道を進むと、竹林の小道にぶつかった。これ以上は本道からはずれてしまうと思い、立ち止まって竹林を見回した。

真つすくな竹の間から光が射しこんでいるのを見て、太陽光がどれだけ景色を左右するのかわかると思い知らされた。

立っていると、通ってきた道から一人の男が歩いてきた。紺のパーカーにベトナムタイガー柄のズボンをはき、黒いシヨルダーバッグをかけていた。短くて茶色い巻き毛の男はわたしに近づくと、面長の顔に微笑みほほえをうかべ、「ハロー！」とあいさつをした。慣れていない英語にとまどい、わたしはおうむがえしに返事をした。

顎あごのまがつた若い男はさらに英語で話し続けた。ゆっくりとした口調で発音もかたいところがあり、なんとか聞きとることはできたが、短い単語で返事をするだけで精一杯だった。男は大げさな手ぶりで話し続け、手に持っていた黒いデジタルカメラの画像を見せてくれた。どうやら京都へ来る前に九州と四国をまわってきたらしい。わたしは四国を訪れたことがないので、興味深く画像を見つづけた。

高い場所から写した瀬戸内海の画像や、神輿みこしをかついだ人々の画像、その人達と一緒に写った男の画像があった。イワンと言う名前のおランダ人は、アジアを約一年ほど旅行をしてから、二ヶ月前から日本をまわっているらしい。それまではインドをまわっていたようで、タイとラオス、ベトナム、カンボジア、ネパールなど、旅行の話をいろいろとしてくれた。言葉ははつきり聞きとれなかったが、目を大きく開き、手ぶりをつかい、声色をかえて話すイワンの姿を見ていてなにか純粹なものを感じた。わたしは会話は嫌いだが、新鮮な話を聞くのは好きだった。

イワンと一緒に行動した。鳥居の道に戻り、階段を上がって頂上を目指した。その間もまがつた長い顎を休ませることなく、イワンはたえず話し続ける。わたしから話す必要はなく、返事をして、短い質問をするだけで十分に会話は成りたった。

イワンの足取りは軽く、わたしも歩くのは自信があったので、お互いの歩調は合った。腰をまげて竹の杖をつく中年女性を追いこし、上着を腕にかけ顔を赤らめて歩く太った若い男を追いこすと、夏に嗅ぐようなすっぱい汗の臭いと、湿気をふくんだぬるい空気を頬ほおに感じた。

イワンは細身の体型で、背は高く、顔が小さかった。顎は左にまがっていたが、ひげはきれいに剃られていて、とても四十三歳だとは思えなかった。外見にもなうように中身にも若さが見られた。

京都の街が見渡せる場所に着き、ベンチに座って数分休憩した。空はふつくらした雲におおわれていて、太陽は隠れ、宿を出た時よりも青空は見えなかった。

わたしもイワンも疲れていなかったの、伏見稲荷大社の看板地図を見て、一周できる道を進んだ。

鳥居の大きさは小さくなっていたが、あいかわらず小道の両わきに太い二本の足をおろし、下をくぐる人間を見おろしていた。道ぞいにくつもの塚を見かけ、そのたびにお稲荷さんの石象が目についた。イワンは大げさ動作をとっては、なんども、「グッド！」と言っていた。あまり見かけなかった紅葉も多く見るようになった。

再び見晴らしのよい場所に戻ってきた。飲み物をおごってくるとイワンが言うので、赤い炭酸飲料をたのんだ。イワンは茶色い茶を買い、茶屋の前のベンチに座って休憩した。時刻は昼を過ぎていて、空腹を感じたが、わたしはおにぎりを持っていなかった。だからといって、高い食事を食べる気もなかったの、我慢することにした。イワンも同様に金をなるべく使わないように心がけているらし

く、食事はいららないと言った。

山を下りることにして、先を急ぐように歩いた。イワンの口数は減り、無言の時間が多くなった。わたしはなにかしら話したいとは思ったが、言葉が浮かばず、頭の中で考えつづけた。たまにどうでもよさそうな質問をしては、その返事を聞いてうなずくだけで、会話を発展させることはなかった。

英語を話せないことがもどかしく、ついに話そうとする気もなくなった。イワンの話す言葉が聞きとれない場合はわかるまで聞き返していたが、その回数が多くなり、どうも気がひけてしまい、聞き返すこともしなくなった。それに、イワンの言葉もどうでもよくなりはじめ、好奇心は失われていた。わたしの嫌いな雑談になりはじめていた。

本殿に着くころには、イワンから離れることばかり考えていた。別れるタイミングをいつ切り出そうとイワンのようすをうかがっていると、イワンは迷彩柄のうしろポケットに手をつっこんでから、あわただしく左右のポケットを調べだした。イワンは財布がないと言いだすと、黒いショルダーバックを地面に置き、かきだすように中を探す。わたしは無言でその姿をじつと見つめた。

財布は見つからなかった。イワンがクレジットカードや銀行のキヤッシュカードなど、大切な物が入っていると苛いらだたしそうに声をあげた。わたしが最後に確認した場所を尋ねると、イワンは目線を小鳥のように動かし、ぶつぶつとつぶやいた。すぐにイワンは頂上付近の茶屋で見たのが最後だと言い、ベンチに置いたと言った。イワンはすぐに茶屋へ戻ろうとしたが、わたしは茶屋に向かう前に、落し物で届いてないか確かめようと言った。

おみくじを売っている人から落とし物が届く場所を聞き、イワンに境内にある小屋へ行くことを目と手で伝えた。イワンは顔をゆがめ、理解できていないように見えた。

小屋に入ると、中年の男性が四人座っていた。わたしは立っていた小太り気味の男に事情を説明し、イワンに何度も目線をやった。中年の男性は不審そうに細い眼でわたし達を見て、「財布は届いていない」と言った。「茶屋に確認はできるか？」とわたしが言うのと電話番号を教えてくれた。わたしはイワンの顔を見て、親指と小指をたてた右手を耳のそばでこざみに振り、左手で携帯電話のキーを押した。

茶屋の人が、財布は預かっていると聞いた。それを聞いてわたしはほっとしたが、表情には表さなかった。「本人の物が確認できないと渡せない」と言うので、「わたしが落としたわけじゃないので、あとで落とした本人と一緒に確認しに行く」と伝えた。

イワンに伝える前に、電話の会話を聞いていたまわりの人が、財布はあると伝えていた。イワンはうれしそうに礼の言葉を連呼していた。まわりの人も反応するように笑顔で声をかけていた。

茶屋へ戻ろうとイワンに伝えて外に出ようとすると、小太り気味の人が茶屋までの近道を教えてくれた。わたしとイワンは中にいた人全員に頭をさげて礼を言った。中年の男性達はそれぞれ、もう落とさないように気をつけるんだよ、とやさしく言った。

イワンの歩調に合わせてわたしは歩いた。イワンがうれしそうに話していたが、まだ財布が手元に戻ったわけではないので、わたしは素直に喜ぶことができなかった。

茶屋に着き、従業員の男に事情を伝えた。わたしと男の会話を邪魔するように、イワンは息を切らしながら英語で猛烈にまくしたてた。老人らしき男は聞きとれていなかった。男は、持ち主かどうか確認したい、と言うので、わたしは財布の色、形、金銭のおおよその額、名前などの質問をイワンに通訳した。イワンは男の言動に理解しかねるようすだったが、自分をおちつかせるように丁寧に答えた。男は急に笑顔を浮かべ、二つ折りの皮財布をイワンに渡した。イワンは爆発したように声をあげて男の手を握り、激しくゆすりながら礼を言った。わたしの手も同様につきみ、くったくのない笑顔で礼を言った。手が痛かったが、イワンにわかるように微笑みを浮かべて、首を縦に数回振った。

わたしが店の人と談話していると、イワンは近くにいた白人の若い男女に話しかけ、この一部始終を語っていた。端正な顔の白人の男女は、人のよさそうな微笑みを浮かべていた。

再び下に向かって歩いていくと、イワンは何度もわたしに礼を言った。「日本語が話せないわたしだけだったら困っていた」みたいなことを言い、わたしに会えたことを神様にも感謝していた。わたしは素直に礼の言葉を喜んだが、わたしに会ったからこそ、財布を紛失したのではないかとも思った。

そのことを口にしないでいたが、本殿に近づくと、イワンはわたしを考えていたことを口にした。心を見透かされたようでわたしは驚いたが、意地の悪い笑みを浮かべて、「会えて残念だったね」という意味の言葉を言った。イワンはうれしそうに笑い、「会えて良かった」としか言わなかった。わたしも同じ言葉をイワンに言った。

わたしはイワンとの出会いをきれいに残したかった。意味のない雑談でわざわざ思い出を汚したくはなかった。本殿の前で、「昼食

を一緒に食べよう」と言うイワンの言葉を断り、親しみと感謝をこめて別れの言葉を言い、わたしはイワンと握手をした。

自転車をこいで東福寺へ向かった。自転車のペダルがなつかしく感じられた。

伏見稲荷大社の人の少なさは対照に、東福寺は人にあふれかえっていた。障害物を避けるように進み、警備員に言われたとおり経蔵のそばに自転車を停めた。若い男が拡声器を使って通天橋のチケット売り場を説明していた。多くの人が声にみちびかれるようにチケットを買い、太い列のうしろについて途切らせないようにしていた。わたしはその人々の動きを見るだけで疲労を感じた。だが、あれだけ人がいるのだから、なにかしらの理由があるのだろう。すぐにチケットは買わず、まずは境内を見ることにした。

昔の便所だという東司に近づき、中を覗くと、母親が昔からなにかと言っていた中国の便所を思い出した。じっさいはどうだかわからないが、中国の便所は扉がなく、“まる見え”だと言っていた。東司内の地面には穴がいくつもあり、これでは、となりで用を済ませている人の姿を、頭からつま先まで見ることができたろう。もともと、礼儀としてなるべく視線をはずしていたかもしれないが。

人の少ない三門を見てから、通天橋へつづく列にまじった。背の低い老人の集団がいれば、茶色い短髪を逆立てた目つきの鋭い男がパンツのラインがくつきりとうかんだ大きな尻の女の手を握っていた。鼻につく甘ったるい香水が臭えば、清潔ですがすがしい女性の髪の毛の香りがして、ムカムカするバターのような化粧の臭いがした。たいていの人は携帯電話かデジタルカメラを手に持ち、中年の男性は黒い一眼レフのカメラを持っている人が多かった。観光場所にいる人間にとって、カメラは水のように大切な物で、カメラを落とす

て紛失してしまえば、干からびて死んでしまうのではないかと思われた。

列はゆっくりと前進した。橋の周りは一面赤色に染まっていた。わたしは今までに見たことのない楓かえでの量に驚き、通天橋を馬鹿にしていたことを恥じた。人々はきまりきったぶさいくな声をあげ、食い放題の食材を前に、むさぼるように写真を撮っていた。カメラをファーコートの左ポケットにしまい、橋に手をかけ、わたしはゆっくりと前へ進んだ。目の細い白髪頭の女性がわたしの右腕にぶつかり、目の前へ出て写真を撮りはじめた。わたしは足を止めてから、女性をかわして前へ進んだ。人々は橋の両端にこびりつき、騒々しくうごめいていた。

橋を渡りきり、のんびりと境内を歩いた。楓の葉はいたるところで赤く染まっていたが、空は重々しい灰色の雲にふさがれ、太陽が現れるようすはともなかった。非常に残念だった。制服姿の三人の女性がそばで、「みてー！ チョーきれいじゃない？」と言いなからデジカメの画像を見せあい、「マジやばくない？ チョーいいじゃん！ マジやばくない？ マジやばくない？ マジでやばくない？」と言っていた。わたしはゆっくりとそばを離れた。

手さげバッグからウイスキーの小瓶を取り出し、なんども口につけては、足をゆっくりと動かしつつづけた。太陽の光が欲しかったが、それでも十分に美しかった。

橋にいる小さい子供がさきほどから泣き続けていた。最初はかわいとは思いましたが、景観を台無しにする、耳奥の神経をさわる泣き声かなが癪かんにさわり、しだいに我慢できなくなった。親がかわいそうだと思ったが、子供は憎たらしかった。わたしは首にかけていたヘッドホンを耳にあて、ベートーベンの「ピアノ協奏曲第四番」を

ながした。楓の木々と人々の動きは音楽に合わせて新たな意味を帯び、美しいものはより美しく、汚らしいものは愛らしく、眼前に広がる景色全体に歓喜と愛しさを覚え、わたしは無性に悲しくなった。

一時間ほど通天橋で過ごして東福寺をあとにした。朝食を食べてから食べ物を入れていなかったため、アルコールがすっかりまわり、強烈に腹が減っていた。

東福寺駅のそばにあるコンビニに寄った。いつもの習慣で雑誌コーナーの前で立ち止まると、ピンク色の派手な表紙が目につき、考えもなしに手にとった。京都の観光雑誌だった。食い入るように雑誌を読み、京都の有名な観光名所をはじめ知った。わたしが訪れた場所は雑誌にはあまり載っておらず、嵐山エリアの観光場所ばかりで、松尾・山科はほとんど載っていないかった。せいぜい醍醐寺ぐらいで、地藏院や月読神社、若宮八幡宮、大石神社などどこにも見あたらなかった。

「わたしはいつたい何をしていたのだ？」と疑問に思ったが、すぐに、昨日と一昨日は、それはそれで楽しかったことを思いだした。それに、雑誌に載っていた場所はどこも人が多かった。

それでも、有名な場所をもっと観光してみようと思った。さらに雑誌を読みつづけると、夜も拝観できる場所があることを知った、それも、紅葉の名所だという場所を。清水寺に高台寺、知恩院に永観堂と、メモ帳に名前を書いた。

何も買わずに外に出て、しわだらけのマップをひらいた。どれも東山エリアに集中していて、まだ訪れていない地域だった。ちょうど、清水寺は東福寺から近く、そのまま北に上るだけだった。時計を見ると十六時半すぎで、食事をすれば拝観するにはちょうどよい

時間だった。わたしは自転車を走らせ、途中の牛井屋に入った。

五条通を右に曲がり、東大路通とぶつかる交差点に出た。信号をわたり、細い坂道へ進んだ。歩道はせまく、坂から下りてくる人にぶつからないよう注意して自転車を押した。下りてくる人の細い流れが途切れないので、清水寺への道は正しいのだ思った。

道は途中でYの字に分かれ、暗い空に一筋の青い光りを放っている場所を目印に右へ曲がった。車はほとんど通らず、人々は道全体に広がって歩いていった。わたしは歩くのがじれったくなり、自転車をこいで坂を上った。多少きつかったが、ここ二日の移動ですっかりギアなしの自転車に慣れていった。

だが、坂は長かった。前方に人の列が見えたので、わたしは自転車からおりて、息をきらせながら自転車を押した。上方には仁王門が浮かぶように赤く輝き、空を指す青白い光りの線が太く、よりはつきりと見えた。

白いテントに集まる黒い人の群れに近づくと、青い服装をした警備員が見えた。わたしは自転車を押したまま近づき、「どこか、停める場所はないですか？」と尋ねた。あさ黒い顔した中年の男が申し訳なさそうに、「止められる場所はないんですよ」と言ったあと、「このへんに停めるわけにもいかないですね」と、あたりを見まわして言った。

足を止めた途端に体から汗が噴き出し、頭はぼーっとなってしまうた。「わかりました」と、自分でも予想できなかった小さい声で言った。列に並んでいる人々が珍しそうにわたしを見ているのに気がつき、急に恥ずかしくなり、ゆっくりと自転車を押しながら回転して坂を戻った。一気に坂をかけ上がったせいで頭が朦朧もろうとしてし

まい、なんだか、どうでもよくなってしまった。

百メートルほど歩くと、右側に石の階段があったので、そばに自転車を停めて階段に座った。階段はひんやりとしていた。体は熱く、自分の呼吸の音を聞きながら、目の前の坂を歩く人々を眺めた。こみあげてくる笑いにたまらず声を出してしまった。滑稽な自分がかしく、顔をさわるほのかな夜風が気持ち良かった。

十分もすると湿った体は冷えてきた。呼吸が落ちついたので、どうするか考えた。坂を下るぐらいならそのまま宿へ戻ったほうがましなので、なにくわぬ顔で清水寺へ入ろうと思った。

歩いて坂を上り、再び白いテントの前に行くと、先ほどよりも人は少なかった。数十人の列にまぎれこみ、警備員を見ないように視界のぎりぎりでの動きを確認しながら、チケット売り場へ進んだ。

なにごともなくチケットを買い、わたしは境内へ進んだ。子供らしい笑みを浮かべてうしろを振りかえり、赤い門へ向かって歩いた。

石段の上にそびえる仁王門は、近くで見るとその迫力をより感じた。だが、驚きはしなかった。門を囲んで見上げ、白い光りを絶え間なく放つ数多くの人々に、わたしの眼はとられてしまった。

土産屋の電球色が道を上る人々の流れを照らし、大量の影を映していた。ドブ川のように整えられた道を流れてきた人々は、仁王門がある広場へ出ると、広大な海へ出るように足早に広がっていった。川は上から下へ流れるが、人の流れは下から上へ流れていた。

わたしは石段を上がり、ライトアップされている紅葉を遠目に見た。石の手すりに人々がへばりつき、ほとんどの人がカメラごしに

紅葉を見ていた。わたしは三重塔を見た。仁王門と同様に人々が囲っていた。

ウイスキーをひと飲みして、暗い境内を歩いた。艶なまめかしく照らされた赤い木々を見るたびに、騒がしい人々が煽あおりたてていた。本能に従って赤い色を探す人々は、暗闇を徘徊しては、吸いこまれるように木々に集まり、ひっきりなしにフラッシュの光りをたいていた。

人の流れに揺られるように廻廊を抜け、ごつたがえす舞台に近づいた。舞台の左端に移動し、茶色い皮のコートを着た若い男と黒いモッズコートを着た若い女が動くのを待った。触れあわないと活動できないように体を密着させ、二人は一緒に写真を撮った。

二人がその場を離れると、わたしは木の手すりに両腕を乗せ、飾られた木々を見るために体を前へつきだし、視線を下にやった。紅葉は綺麗だった。太陽光に透かされるほど葉の色は鮮やかではなかったが、暗闇に映しだされることでまた違った美しさがあった。それがいやに悔しかった。

その場を誰にも譲る気がないように、わたしは立っていた。小さな縄張りを精一杯守るように、近づく人を嫌悪した。

わたしはウイスキーを飲み、上空を見上げた。洗濯板を斜めに傾けた雲が横に伸び、果てしなく続いていると思われた。

わたしはウイスキーを飲み、左腕を手すりに乗せて右へ向いた。遠く京都の街は無数に発光して、活発に活動していた。目の前では、入れ替わるように手すりを埋め続ける人々の黒い輪郭線がくつきりとして、活発に光りを放って活動をしていた。

わたしはウイスキーを飲み、前方に目をやった。ぼんやりした灯りがうつすらと遠くの木々を照らしていた。逆三角形に大きく照らされた部分は暗闇から浮き出て、鈍い黄緑色に苔色、それにぶどう酒色が分布され、昨日買った物をしたスーパーマーケットの野菜コーナーを思いだした。暗い山の斜面に巨大なサニータスが売れ残って見え、思わずふきだしそうになり、隣にいた黒と白の縞柄のマフラーを巻いた若い女性に声をかけそうになった。女性は三人組みの一人で、可愛げに写真を撮っていた。

わたしはウイスキーを飲み、左に顔を向けた。木々が電球色に長く照らされ、底辺の崩れた台形を呈していた。その下の暗闇から白い光りが星のように煌き、フラッシュもこうやって見ると意外に綺麗だと感心した。

わたしはウイスキーを飲み、手すりによりかかっつうしろを見た。色のぼけた多くの人かもぞもぞして、手すりの後方へ視線を向けていた。腕をからませる背の低い若い男女、互いの手を縫うように握る品のある老夫婦、喚くように話す若い男の四人組、丸い眼をした子供の手を引く色の黒い夫婦、軽装でふくよかな金髪の女性と縁のない眼鏡をかけた黒髪の女性の二人組み、色々な人がいたが、どれも同じように見えた。

わたしは再び紅葉を見た。蟻のようにウジャウジャと暗闇を歩き、蠅のようにブンブンと紅葉を飛びまわり、カメラのレンズを眼球代わりにして、自然を汚す毒虫のように人々が思えた。ただ、うるさいだけの存在でしかなかった。

だが、人々をよく見ると、それぞれがうれしそうな顔をしていた。わたしが嫌いな人々の姿を見て、変にうれしくなった。

いつも一人が好きだった。目の前にいる人々のように、誰かと一緒に行動して、楽しい思いをした記憶があまりなかった。なんで人々が一緒に行動したがるのか理解できなかった。一人で外食できない者や、誰かがいないと服を買いに行けない者、映画を一緒に見に行く者、ましてや集団で温泉に行く者など、どれも理解できなかった。わざわざ手間をかけて一緒に行動するのかわからず、一緒に行動したことについて愚痴を言う人がさらにわからなかった。

わたしはウイスキーを飲み、もう一度うしろを振りかえった。ふと、鈴虫寺の近くで道を教えてくれた小男や、ゲートボールをしていた老人達が頭をよぎり、今日出会ったイワンを思い出した。

必要以上に人と行動する必要はないと思っていた。大抵のことは一人で済ませられると知っていたし、自分一人では無理な場合にこそ、誰かに助けを求めるべきだと思っていた。食事も買い物も、映画も、温泉も、一人で十分に楽しめた。わたしには人が必要ではなかった。だから、必要以上に群れる人が理解できず嫌悪していた。

だが、目の前で楽しそうにしている人々を眺め、ふと気がついた。この人達は誰かと一緒にいることがあたりまえであり、それを喜びとしているのかもしれない。また、誰かと一緒にいることを常に必要としているのかもしれない。それは、わたしにはない性質だと思っただ。

わたしは一人だった。わたしの目に映る人々の多くが誰かと一緒にいた。わたしはそのことを寂しくも思ったが、嫌ではなかった、むしろ、不可解な心地良さを感じた。

背の低い男女が一つのカメラを互いの手に持ち、互いの顔が触れるほど近づけて画面をのぞきこんでいた。二人はとても幸せそうに

小声で言葉をかわしていた。

わたしは人と雑談するのは好きじゃなかったが、人を見ているのは好きだった。それに、身近な人間を嫌っていたが、人間は嫌いじゃなかった。

わたしはウイスキーのふたを開けて口にしたが、わずかも残っていないかった。

ファイル4

ファイル四

三日坊主ではないが、三日も同じ場所で寝泊りするとしぜんに体が慣れてしまうのだろう。ドミトリーの静けさも気にならず、平気で音をたてるようになり、快適に眠ることができた。レセプションで会う外国人にも笑顔であいさつできるようになり、誰の目を気にすることなく、堂々とくつろぐことができた。

わたしは早朝に起きて、レセプションの奥のテーブルで新聞を読んだ。食パンにマーガリンをぬり、屑くずをポロポロ落としては、ミルクも砂糖も入っていない熱い紅茶を飲んだ。京都の旅行も今日が最終日で、夜にはバスに乗って東京へ戻らなければいけない。この宿も午前中にチェックアウトしないといけないが、今日の予定はすでに決まっていた。

昨日の夜、細身の女性従業員に出発まで荷物を置かせてもらえなしかと尋ねると、笑顔で了解してくれた。それに、最終日はどこを観光するか迷っていたが、同じ宿に泊まっている日本人女性と話す機会があり、京都の観光場所について教えてもらった。

長い黒髪がとても涼しげな日本人女性は、狐のような細い目をしっていて、ほとんど表情を変えず、淡々と鞍馬山の素晴らしさを説明してくれた。叡山電鉄からのぞける紅葉がきれいだと言っていたが、わたしは鞍馬山の自然についての説明に興味がわいた。運賃を聞くのと、往復千円はかからない、と言った。なるべく金は使いたくないが、寺をまわるよりは安く済むと思った。それに、混雑した人々に

触れるよりも、自然に触れるほうが気持ち良さそうに思えた。

狐目の女性は五十過ぎのドイツ人男性と一緒に旅をしていて、京都に来る前まではインドにいたらしい。わたしは海外を訪れたことがなかったもので、興味深く話を聞いた。つい職業が気になり、ずうずうしく尋ねると、女性はメイクの仕事をしていて、男性は画家だと教えてくれた。

それで京都観光の最終日は、鞍馬山へ行くことにわたしは決めた。早朝から出発することも考えたが、忙しく寺をまわるわけではないので、宿でのんびりと朝を過ごすことにした。

荷造りをほとんど終えていたので、やることがなかった。なので、宿の近くにある二条城の周りを散歩した。犬を連れて歩く人やジョギングする欧米人が何人もいた。

宿へ戻り、黒いポストンバッグをベッドからおろし、レセプションにいた細身の女性に渡した。女性は大きな目を開き、人なつっこい笑顔を浮かべて、「つぎはどちらへ行かれるんですか?」と言った。わたしは、「いえ、東京の自宅へ戻るんですよ」と言い、苦笑いした。

暇だったので、細身の女性従業員と話し続けた。女性は旅が好きらしいが、まだ日本国内を出たことはなく、まずはタイに行ってみたいと言った。なぜタイに行きたいのか尋ねると、物価が安くて、他のアジアの国に比べると治安は安全だと言い、それから、うれしそうに目をそらして、現地の料理を味わってみたいと言った。「宿の手伝いをしながら写真の勉強をしているの」と言った女性の言葉が、わたしは苦々（にがにが）しく感じられた。

十一時になり、わたしは赤いフレームの自転車にまたがり、叡山電鉄の乗り場である出町柳駅の場所を確認して、北へ向かった。かご付の自転車も今日でお別れだと思つと、力いっぱいペダルをこいだ。

堀川通から今出川通を右へ曲がり、真つすぐに進んだ。鴨川を過ぎて道を左へ曲がり、すこし進むと出町柳駅が右前方に見えた。駅のそばの駐輪所に自転車を停めた。

電車に乗るのはひさしぶりだ。働いていた時は何度も使うことがあつたが、会社を辞めてからは一度も使わなかつた。近所の川ぞいをサイクリングするぐらいで、まったく遠出することはなく、その必要もなかつた。わたしは一人用の座席につき、窓から景色を眺めた。

三十分ほどで鞍馬駅に到着した。乗客が降りるのを待つてからホームへ足を踏み入れると、冷たい空気が肺に流れこんだ。濁りのない空気が豊富な自然を感じさせた。

思つていたほど人は多くなかつた。ぽつぽつと人が歩き、うるさくなく、ちょうどよいぐらいだった。

十分もしないうちに鞍馬寺への入り口に着き、石段を上つた。

ケーブルカーを使わずに歩いて鞍馬寺を目指した。由岐神社を抜けて、九十九折参道を歩いた。今日も天気にも恵まれていたので、歩くのが楽しかつた。

中門を過ぎると、ファアの付いたモスグリーンハーフコートを着た若い女性と、薄手の黒いダウンコートを来た女性がベンチに座つ

ていた。どうやら、母子のようだ。目の前をわたしが通り過ぎると、カタン、と何かが硬い地面に落ちた音がした。すると、母親らしき女性がヒステリックな声を出した。わたしは歩みを止めずに前へ進んだ。

カメラを落としたことを責めて、くどくど注意する声が耳に入り、母親と同様に大声をあげて反論する娘の声が聞こえた。母親が、カメラを大切に持っていなかったことを非難して、娘は、カメラは大丈夫だと必死に弁解していた。こんな場所まで来てささいなことを言い争う親子の声を聞き、一人でいることにわたしは喜んだ。寂しいかもしれないが、わずらわしさはなかった。

うしろを振りかえると、母親が、「カメラを貸しなさい！」と、高くひきつった声を出し、娘は負けじと、「大丈夫よ！」と言つて、母親が座っているベンチから離れた。娘が抱える黒いカメラを見て、母親が痾癩かんしゃくを起こすのもうなずけた。

先を歩き、言い争っている二人のことを考えた。あれだけ感情を爆発させ、互いを憎みあうように言い争ってはいたが、二人きりでこの場所へ来ているのだから、おそらく、仲は悪くないんだろうと思った。

何度も足を止め、うしろを振りかえつては、高さを確認するよう
に山からの景色を眺めた。伏見稲荷大社や清水寺でもそうだったが、
自分という小さい存在を実感できる高低差のある風景が、たまらな
い感動を与えた。

細い石段を上っていると、娘が両手にカメラを抱え、わたしの横
を過ぎていった。うしろを振りかえると、登山者用の木の杖をつい
て全身で呼吸している母親の姿が、すこし離れた場所に小さく見え

た。娘は母親のペースに合わせることなく、あてつけるようにどんどん進んでいく。

さらに進むと小さな小屋が見え、そのそばで娘は写真を撮っていた。その横をわたしが通り過ぎたあと、娘は近づいてきた母親に、「休む場所あるよ」とつつかかると言った。母親は目線を変えず、「ああ、そうね」と息切れした声で言ったが、歩みは止めなかった。

やがて本堂へたどり着き、境内をふらついた。母親は見晴らしのよいベンチに座り、娘は元気よくあちこちで写真を撮っていた。

境内を一回りしてからベンチで休憩し、わたしは貴船へつづく小道を進んだ。

冬栢亭に近づくと、眼鏡をかけた坊主頭の男が写真を撮っていた。わたしが冬栢亭をじっと眺めていると、坊主頭は小道の先にある小さい門を撮りはじめた。写真を撮り終わるのを見はからって、わたしは体を動かした。

半数以上の人は本堂で引き返したらしく、追い越していく人はほとんどいなかった。わたしの百メートルぐらい前を歩いている坊主頭の男がいるだけで、鳥の鳴き声もあまり聞こえず、木々が茂る山道は静寂に包まれていた。わたしの歩調は遅かったが、前を歩く男の歩調も遅かった。

写真を撮らずに歩いていたので、やがて坊主頭を追いこした。すると前方にさきほどの母子の姿を見つけた。母親の疲労具合を見ていたので、わたしはすっかり驚いてしまった。

わたしが二人のそばで木の根道を眺めていると、立ち止まっていた母親は写真を撮っていた娘に、山道についての愚痴をこぼしていた。だが、さきほどまでの険悪なムードはなく、呆れたものあきの言い方だったが、さほど嫌そうでもなかった。娘は写真を撮り終えると、「わたしは大杉を見てくるからね」とあっさり言い、母親を残して木の根道の先へ歩いて行つた。母親はふざけた調子でこたえ、小道のわきから動こうとしなかった。（この母親の体力で貴船までもつのか？）わたしはよけいな心配をってしまった。

活力を含んだ光りが射しこむ豊かな山道をさらに歩き、やがて、奥の院にたどり着いた。数人の人がベンチに座り、時を忘れたようにじっとしていた。わたしが拝殿に近づくと、固まっていた場の空気をかきまわしたように思え、うしろからの視線に気づまりを感じた。わたし以外に動いている人はいなかった。

わたしもベンチに座り、足を休ませていると、上から母子の話す声が聞こえた。母親がゆっくりと杖をつきながら歩き、杖のありがたみをはじめて知つたと、前を歩く娘に遠慮なく話し、娘は適当なあいづちをうっていた。思ったよりも早く自分に追いついたので、わたしはまた驚いてしまった。二人に遅れて坊主頭の男も下りてきた。わたしはふたたび小道を歩きはじめた。

チケットを買つた時にもらったパンフレットを見ると、登山道も終わりにちかづいていることがわかった。遅かつた歩調をさらにゆるめ、一歩一歩を確かめるように歩いた。

五分もしないうちに後方から人の声が聞こえ、あの母子が近づいていることがわかった。歩調を速めかけたが、我慢しておさえた。母親は奥の院について陽気な皮肉をこめて娘に話していた。

二人がさらに近づいたので、小道のわきに足を止めてパンフレットを見た。二人は黙ったまま会釈えしゃくをして通り過ぎ、再び楽しそうに会話を始めた。母親からの止むことのない山道への文句に対して娘が、「わたしなんかウエスタンブーツよ、登山なんてするとは思わなかった」と言い、母親は笑いながら、そんな靴を履いてきたことを注意した。わたしはひそかに笑ってしまった。

少しすると坊主頭にも追いつかれ、再び道をゆずった。

ある場所を通り過ぎると、川の流れが聞こえた。貴船川の音だと思い、山道が終わるのだと考えると、物足りなさを覚えた。だが、みずみずしい音を聴くと、新鮮な世界がひらけているようにも思え、昔の人間が山を越えるのを想像した。

現在みたいに道は整っていないだろうから、歩くのはより大変だったかもしれない。きつと、川の音を聞いたときの感動はわたしの何倍もあるのだろう。それに、源義経もこの川の音を聞き、貴船を感じたかもしれない。

しだいに川の音は大きくなり、西門をくぐると鞍馬山の登山道は終了した。川に沿ってアスファルトの道を歩き、わたしは貴船神社へ向かった。

灯籠とうろうが両わきに並ぶ参道を抜けて本宮へ着いた。御神水で手を清めてから、休憩場所にあるベンチに座り、持っていたツナおにぎりを取り出して、目の前に広がる貴船川の景色を眺めながら口に入れた。隣りでは、聞きなれない言葉で男女が仲良さげに話し、右奥のベンチには、黄土色のハット帽をかぶった老いた男が灰色の背中を丸め、その横で、タツパを左手に持った白髪頭の老女が食事をしていた。

食事後、川沿いを上って歩き、奥宮を訪れた。太陽は山の裏に沈み、陽のあたらない境内は人がおらず、とても静かだった。“連理の杉”という、杉と楓かえでが癒着ゆちやくしたすがたを見てから、わたしはその場を去った。

川沿いを下って歩き、貴船口駅へ向かった。途中、バス乗り場があったが、なんら関心なく通り過ぎた。

バスがわたしを追いこし、乗客が何人も見えた。空は少しずつ色を深めていった。わたしはヘッドホンをはめて、ベートーベンの「バイオリン協奏曲」をながした。紅葉はきれいだったが、裸にちかい梢こずえがやけに目につき、迫力に欠けてもの悲しかった。

途中、ガードレールの切れ目を見つけ、躊躇ちゅうしゆなく貴船川に足を向けた。刈られた草の上を歩くと、湿ったやわらかい弾力が足の裏に感じた。川岸に立ち、緩やかな流れを見つめ続けた。小川は規則正しく流れているように見えた。川底には楓の葉が沈み、そのなかの一枚がちよつとしたひょうしに浮き上がり、水面にちかづいて流されていった。葉の動きはバイオリンの音と合っていたわけではないが、わたしの全身に鳥肌がたった。

そのまま見つめていると、色は薄いが輪郭のはつきりした小さな楓の葉が流れてきて、水の流れに逆らうことなくゆつたりと、なめらかな線の余韻よゐんを残して流れ去った。

すぐそばにあった大きな石に手を使ってよじのぼり、乾いた苔こけがこびりついたその上であくらをかいて、ヘッドホンをはずして川の流れを見下ろした。

わたしは流れ去った小さな楓の葉を思った。葉先が丸くならず、シャンとした姿を思い浮かべると、ついさっきまでは、枝にぶらさがっていたのではないかと思われた。あの葉は、木にぶらさがっている時は誰の目にも留まらなかったらう。無数の赤い仲間達の一部として、見られているようで、見られてはいなかったのらう。また、地面に落ちたとしても、やはり道を埋める葉にまぎれて同じことだらう。

だが、たまたま川に落ち、川底に沈むことなく、優雅に水面を流れたことよってわたしの目に留まり、その真価を発揮することになったのらうか？

友人達と一緒に働いていた会社を辞めたことに、わたしは後悔していた。しかし、友人達と一緒に働くのが苦痛で仕方がなかった。そのまま働き続けていれば生活は安定したかもしれないが、わたしの心はもたなかったらう。四ヶ月が経過した今だからわかるが、実際、わたしの言動はおかしかった。それに、そのことに気がついていなかった。あのまま働いていたらどうなるかわからなかった。

だが、逃げるように会社を辞めて一ヶ月が過ぎると、働いていた時はわたしのなくさめ場であった家庭が、会社の友人達のようになくなってしまった。働くための原動力だった亜紀子と智也がわたしにのしかかり、しだいに忌み嫌うようになった。

一日中家にいると、亜紀子は会社を辞めたことを責めた。わたしのささいな行動を見ては、難くせをつけ、会社を辞めたことに話頭を運んだ。社会保険について話してから、子供の養育費についてくどくどと説明して、子供の教育や家庭の今後についての憂いを話したあと、わたしの我慢の足りなさを責めた。最初はわたしも反論していたが、その倍の言葉が返ってくるだけで、わたしの言葉はいっ

こうに理解されることはなく、やり場のない怒りがたまりつい手を出てしまいそうになった。

しだいに反論しても無駄だとわかり、ただ、亜紀子の言葉をかわすことだけを考えた。三歳になったばかりの智也を保育園に送っては、家事を済ませ、狭いアパートから逃れるように外を散歩した。アパートにいと亜紀子と智也の存在が頭にちらついてしまい、とてもまともではいられなかった

あらたに働き口を見つければよかったのだが、働く気がしなかった。どうせ、友人達と働いていた頃のようになるのだと思っていた。それなら、主夫として生活すればいいと思ったが、亜紀子の言動はチクチクとわたしの心を刺し、智也の存在が一日ごとにつつとうしくなった。わがままな言動が気になり、泣き声を聞くたびに気がおかしくなりそうだった。狭いアパートで、わたしは何度も絶望を感じた。

それなら友人達と一緒に働いていたほうがましだと思ったが、わたしはすでに会社を辞めていた。再び戻る事など、考えただけで恐ろしくなった。働くこともできず、家にいることもできない。どうやって生きていくのかわからず、三十歳という年齢を直視しては、どうにもならない不安に全身を震わせるだけだった。

川の流れを見つめ続け、忘れていた日常が思い出された。バスに乗って東京へ戻り、亜紀子の約束どおり新しい仕事を探すことを考えると、身震いと同時に吐き気がして、たまらなく泣きだしそうだった。

流れていった楓の葉がうらやましかった。一本の木にぶらさがり、しわくちやに枯れるまでしがみつき、舞うことなく地に落ちて踏み

つけられなくなかった。

ファイル5

ファイル五

亜紀子、わたしが家に戻っていない理由をいまさら説明する必要はないと思う。京都で過ごした四日間の断片を集めれば、わたしという人間を知ることができるはずだ。理解できないとしても、どんな行動をとるかは想像できるだろう。ただ、わたしが心配なのは、他のファイルの文章が長いからといって、さきにこのファイルの文章を読んでしまうことだ。だが、几帳面で何事もおろそかにしないおまえのことだから、そんなことはしないと知っている。それに、したところで、結局他のファイルを読むはめになるのだから。

働き者で責任感の強いおまえだ、今後の生活はなんとかなるだろうし、なんとかするだろう。わたしはそれを知っているから、安心して行動をとることができる。それに、わたしが働いていない間、おまえの給料で生活をやりくりしていたのだ。わたしという人間の生活費は浮くのだから、生活は楽になるだろう。ストレスの原因もなくなるからだから、おまえは智也の存在によって神経を休ませることだろう。

今だから正直言うと、わたしは智也が嫌いだった。智也が生まれておまえからの愛情は感じなくなったように思える。わたしは今でもおまえを愛しているが、智也を愛しているのかわからない。おまえからの小言はなんとか我慢できたが、智也の泣き声はとも我慢できず、神経を鑢やっしで削られているようだった。智也の醜い顔を思い出すだけでぞっとする。いや、そんなことはどうだっていい。

わたしがいなくても幸せに暮らせとは言わない。父親のいない家庭はどう考えても幸せではないからだ。わたしはそれを知っている。だから、気休めの言葉など送りたくはない。

わたしは不幸な人間だ。そんな人間と結婚したおまえはわたしとおなじように不幸で、そんな両親を持つ智也はより一層不幸だろう。だから、わたしがいないほうが多少は幸せになるんじゃないかと思う。なぜなら、わたしはおまえ達と生活することを望んでいない。それに、おまえたちは新しい家庭をつくる機会ができるからだ。

きつと、こんなわたしをおまえは憎むだろうし、智也も当然憎むだろう。いや、もしかたら、感謝に変わるかもしれない。

お別れだ、亜紀子。神様はわたしの存在を許してくれる。いずれ、おまえも許してくれるとわたしは願っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0740p/>

文書ファイル

2010年11月28日23時18分発行